ゼミナール

理論と実践力を磨き「学びの成果」を発信

調査・討論・発表する中で、自ら課題を見つけ、解決する力を身につけることができるゼミナール。先生や学生同士、密接にかかわることでコミュニケーション能力や、プレゼンテーション力も高められる。このページでは、学んだ成果を学外に発信した活動を紹介する。

キャンパス飛び出し積極交流

現代をとらえる 多彩なインタビュー記事

『SHOW』第4号完成

文・川上ゼミ

「わ」
あなたは何を想像しますか
SHOW
2009.12 No4
Kawakami Seminer

▲『SHOW』第４号

川上隆志ゼミ（文学部日本語日本文学科日本文学文化専攻）の雑誌『SHOW』第4号が刊行された。今号のテーマは「わ」。和、倭、話、輪、羽の五つの「わ」を基にさまざまな事象をゼミ生40人の若々しい感性で追求した。

『SHOW』は岩波書店の元編集者である川上教授の指導で雑誌づくりの基本を学び、企画、構成、取材、原稿書き、撮影、DTPによる紙面製作、校正まで雑誌出版の一連の作業を行う。「現代をとらえ、問題点を提示する雑誌づくりの〝死命〟」（川上教授）を学ぶことを最大の目的にしている。

120ページ（グラビア16ページ）の雑誌はインタビュー記事が盛りだくさんだ。

古代日本の遺跡、古墳を研究する兵庫県立考古学博物館の石野博信館長、「一生噺家」を自認する校友の立川談修さん（平7法）、フリーの流儀を語るライターの岸川真さん、キャンパス生活を和服で通す泉心さん（文1）、方言について研究する国立国語研究所の大西拓一郎氏と本学の永瀬治郎文学部教授、故郷は日本、母国は韓国と言う在日韓国人3世の松本淑安さん…。

いずれも丁寧な取材でそれぞれのメッセージが余すところなく引き出されている。

岸川真さんを取材した佐藤圭さん（2年次）は「インタビューは初めてのことで緊張しましたが、テーマに沿って一つのものを作り上げる喜びを知りました」と語っている。

また、第4号編集長の古野智章さん（3年次）は「ほぼ1年間、校了間際は寝不足になりながら作業を重ね、『SHOW』の出来上がりを見た時は感動しました。段取りや人との接触の大切さなど、学んだことはたくさんあります」と雑誌づくりで得た発見や財産を語った。

『SHOW』第4号希望者は、生田キャンパス10号館の川上隆志研究室古野編集長まで。問い合わせは、1j 192066@senshu-u.jp

▲　完成した『SHOW』第４号を手に川上ゼミ生

専大―公立はこだて未来大学／函館高専

携帯電話の新アプリを共同開発

経営・渥美ゼミ

「モバイル情報通信システムとその応用」を研究テーマとする経営学部・渥美幸雄ゼミでは2007年度から、公立はこだて未来大学・高橋修／新美礼彦研究室（以下、未来大学）と携帯電話の新しいアプリケーション開発に取り組んできた。

09年度は、新たに函館工業高等専門学校・藤原孝洋研究室（以下、函館高専）が加わり、渥美ゼミが、ビジネスモデルとアンケート調査を、未来大学と函館高専が、ソフトウエア開発、サーバー管理・構築を担当。得意分野を生かした文理合同のプロジェクトで、ユーザーが満足いく買い物ができる商品登録機能やサーチ機能、地図情報をつけた「リコメモ」を開発し、12月16日、生田キャンパスで合同発表会を開いた（写真）。

渥美ゼミ代表の千葉佳直さん（3年次）は、「女子学生の経験から生まれたアイデアを基に、協力企業からアドバイスをいただいて、完成することができました。今後は、このビジネスモデルを実際に使ってもらえるよう、『営業』していきます」と話した。

【専大発表者】千葉佳直、青木拓也、今井健太、萩原亜衣、林昌志、古家那緒人、安田裕加（以上、敬称略）

趣旨を説明する渥美教授

「大学生と大不況」

8カ月間の調査結果を発表

経営・石崎ゼミ

経営学部の石崎徹ゼミでは「広告戦略研究」をテーマに、グループディスカッションを通し、広告戦略やマーケティング、市場調査を学んでいる。

寺尾仁快さん、松村祥佑さん、折川祥子さん（いずれも3年次）の3人は、首都圏の6大学（専修、駒澤、上智、成蹊、東洋、早稲田）でマーケティングを学ぶゼミの有志による「第15回大学生意識調査プロジェクト（FUTURE 2009）」に参加。キャンパスを飛び出し、学習の成果を発揮した。

同プロジェクトは、広告代理店・博報堂のスタッフから指導を受けながら、大学生約1000人にアンケートを実施。調査内容の設計、分析、発表などを行う。今回は『不況』にスポットを当て、「百年に一度の大不況と大学生」というタイトルで調査をまとめた。11月27日、東京都の電通銀座ビルで行われた記者発表会で8カ月間にわたる調査の成果を報告した。

石崎ゼミは、同プロジェクトに毎年参加している。今回、副代表を務めた寺尾さんは「ゼミ活動と並行して行われたので、ゼミで学んだ知識を実践する場となりました。改めてアンケート結果を見て、もっと適切な質問の仕方があったと考えられるようになりました。大学間の垣根を越えた仲間たちと出会い、ディスカッションを重ねたことで、人間的にも成長できたと感じています」と感想を話す。

また、松村さんは日々の活動や2泊3日で行われた合宿などを振り返り、「大学生活の中で、ここまで熱中したことはないと思います。活動を通じ、自分に自信が持てるようになり、積極性が身についたと思います」と語った。

百年に一度の大不況と大学生

▲　記者発表後に石崎教授（左端）と右から折川さん、寺尾さん、松村さん

活躍する若き校友を訪ねて

ゼミや課外活動など本学での学びや交流が、今の仕事にどう生かされたか。今後の抱負は――。さまざまな分野で活躍する若き卒業生3人に聞いた。

『浦安発の改革』を全国へ発信したい

千葉県浦安市議会議員

西川（さいかわ）　嘉純（よしずみ）さん
（平11経営）

中学から高校という多感な時期、共同通信社記者の父の仕事の関係で、米国で過ごした。「湾岸戦争時、米国をはじめ各国の友人と徹底的に議論したことが、政治を意識し始めたきっかけです」。

帰国後、「日米の若者の意識の違いは『教育』に原因があるのではないか」という思いを抱きながら専大では、非営利組織の経営などを熱心に学んだ。卒業後はテレマーケティングの会社に勤務。「思い」を実現する道を模索していた時、川田龍平・現参議院議員のホームページに「教育」について自分と同じ意見が載っているのを見つけた。「感激して思わずメールを送りました」。以来交流をもつようになり、その縁で当時衆議院議員だった川田さんの母、悦子さんの秘書に。無所属議員の秘書の経験から「1／480という小さな力でも情熱をもって取り組めば、かたちになる」ことを体験した。

議員秘書として培った経験を生かし、帰国後に住んだ浦安市を住みよい街にしたいと07年4月、市議選（定数21）に立候補。37人が立候補する激戦の中9位で当選し、スタートラインに立った。現在力を注いでいるのは、「持続可能な行政運営」と「教育改革」だ。

「浦安は、他の都市に比べて30代が多く若い街ですが、高齢化による税収不足という問題がいつかはやってきます。安心して住み続けられるよう今から対策を立て、将来の安心を提供したい。先を見据えた『浦安発の改革』が全国のモデルケースとなるよう、取り組んでいます」。

読み聞かせボランティアで、子どもたちや保護者と触れ合うことが市の課題を見つける参考になっているという。「会社員時代の仕事は、お客様の声を企業の課題解決に役立てるものでした。これからの行政には『経営』感覚が求められ、学部の学びも生かされています」。

「好奇心」と「チャレンジ精神」をもって走り続ける中で選択してきたことが、今に結びついている。「動かなければ何も変わらない。混迷する時代だからこそ、明るい夢を描こう」と次世代に呼び掛ける。

異文化との葛藤の連続 相互理解の大切さ学ぶ

青年海外協力隊員としてエチオピアから帰国

エチオピアでムルシ族の男性と

濱名加枝子（はまなかえこ）さん
（平15経済）

途上国で国際協力を――。高校時代からの夢は、アフリカ中部の高原の国、エチオピアで結実した。08年から今年1月まで2年間、青年海外協力隊員として同国に赴任。「葛藤（かっとう）の連続でした」と振り返る。

英語に加え公用語のアムハラ語を学び、勇躍壮途についたのは、首都アジスアベバから南へ280キロのアワサ。仕事は職業訓練短期大学でのコンピューターの操作指導だ。ところがウイルスが蔓延するなどコンピューター環境は劣悪。生徒たちに根気よく教えても、なかなか理解してもらえない。そこで取り組んだのは、指導ではなくコンピューター操作を滞りなく行うための環境改善。

しかし、始業や約束の時間をきちんと守ることなど、日本での常識を取り入れようとしても「分かってもらえないのです」。理解してほしいことが受け入れられない。やりたいことが進まない。「情熱とのギャップを感じました」。

80以上の民族があり、固有の文字を持ち、アフリカ諸国の中では珍しく欧州の国に支配されなかった国。そんな歴史をもつせいか、人々は誇り高く、優しい。

「エチオピアには『一人で食事をする人は、一人で死ぬ』ということわざがあります。顔を合わすたびに親しくあいさつをかわし、食事はいつも皆一緒。人間は一人では生きられない。手を携えようという考え方です」

その国にはその国の〝生き方〟がある。「文化、伝統を理解して、援助を行うことの大切さを理解しました」。

専大時代は経済学部国際経済学科で狐崎知己教授のゼミに入り、NGOや途上国の経済発展などを研究した。タイ、メキシコ、グアテマラ……。長期休暇になると海外に飛び、スタディツアーなどで現地視察に励んだことが、礎になった。

「今後も開発援助の道を歩みたい」と、エチオピアの次の道を模索中。悩む前にまず行動。そんな姿勢が似合う。

監督と選手を情報でつなぐ J1復帰へ全力でサポート

柏レイソル　テクニカルスタッフ

丸井（まるい）　剛（たけし）さん
（平20ネット情報）

「チームの勝利に貢献できたときが一番うれしい」。入社3年目で現在は強化部に所属。トップチームのテクニカルサポートに携わる。09年のシーズンは16位に終わり、今季はJ2が舞台。

「監督と選手を『情報』でつなぐのが仕事。1年でJ1に戻るため、全力でサポートします」。

「テクニカルスタッフ」という仕事との出合いは偶然。本学サッカー部コーチでもある飯田義明経済学部教授の教養演習「スポーツのフィールドに出よう！」を受講していたとき、「日本フットボール学会で研究発表をする機会をいただいたのです」。発表に向け、当時専門職化しつつあったテクニカルスタッフと、経営戦略・チーム強化への映像利用の可能性を調査。その一環として、柏レイソル強化部スタッフの下平隆宏さん（現U―18監督）の仕事を手伝うようになり、チーム強化に力を貸してほしいと勧められた。

1年目はスカウト資料作成のため、大学チームの練習や試合に足を運び、プレーデータの数値化や、撮影データの映像編集を担当した。サッカーのプレー経験は小学生の時のみ。初めは試合の流れを追うことができず「必要な情報がない。『サッカー脳になれ』と怒られました」。足りない部分は学部で身につけたパソコンスキルでカバーした。

「見る相手によって必要な情報を選別し、分かりやすく伝えることが大切。学会発表のときに、上平崇仁准教授からアドバイスをいただいた点が生かされています」。

「情報、人脈を学外に求めて精力的に活動した4年間だった」と語り、「知りたいこと、やりたいことを追い求めた結果、今につながる恩師と出会い、『燃焼しつくした』と言えるものを残せました」と振り返る。

今季からは本学サッカー部の渡部博文選手（経済4）が同じチームに本格的に加入する。「専大卒業生のタッグを期待していてください」と頼もしく語った。

第6回神奈川産学チャレンジプログラム

本学から最多の38チームがエントリー

（社）神奈川経済同友会が主催する「第6回神奈川産学チャレンジプログラム」の表彰式が12月16日、横浜市の神奈川県民ホールで開かれた。本学からは参加18大学中最多の38チームがエントリーし、最優秀賞の2チーム、優秀賞の7チームが表彰を受けた。これは企業が提示した課題に対し、学生たちが日ごろの学習成果を生かして解決のためのプランを提案するコンテストで、産学連携による人材育成を目的に毎年開催されている。入賞チームと代表者からのコメントは次のとおり（敬称略。カッコ内先頭が代表）。

最優秀賞

学んだ経営戦略を実地に

経営・矢澤清明ゼミ（吉村保彦、龍神史明、小倉康彰、河井紀宏＝3年次）

京急百貨店にオリジナルサービスとしてデパ地下食品を配達する「京急ハートフル・ダイニング」を提案しました。店頭アンケートでニーズを確認し、損益分岐点売上高を算出。実現性、具体性をアピールしました。ブルーオーシャン戦略、フェルミ推定などのゼミで学んだ経営戦略論や分析方法を実際に用い、成果を十分に発揮することができたと思います。

「最高のプレゼン」を実現

商・国田清志ゼミ（有我和記、阿部智也、小坂明裕、杉本瑞貴、朴賛元、都築宏子＝3年次）

京急ストアの「安全・安心を重視したスーパーマーケット」という課題に対し、①従業員の意識改革②お客様の意識改革③事業情報の開示――を軸とした、従業員とお客様を結びつけるフリーペーパーの作成を提案。

「最高のプレゼンをする」という目標に向かって団結し、それが最優秀賞という形で実り、達成感、充実感を得られました。

優秀賞

特性生かす「婚活ビル」提案

経営・馬場杉夫ゼミ（撰真人、永藤友香、黒崎竜太郎、清水沙耶花＝3年次）

ショッピングセンター「横浜モアーズ」の新しいフロア構成案として、未婚率の高い横浜という立地特性を生かした「婚活ビル」を横浜岡田屋に提案。思うように提案がまとまらず、苦労しましたが、「恥じないものを作ろう」と一致団結し、良い提案ができました。一人ひとりの責任感が強まり、計画力、忍耐力が身についたと思います。

農業生産で新規ビジネス

経営・福原康司ゼミ（西澤祥兵、郷原莉佳、山口将治、尾崎千尋＝3年次）

バンテックの課題「異業種企業とのコラボレーションによる新ビジネスモデルの構築」に取り組みました。提案は大学とのコラボによる植物工場での農業生産。新規ビジネスなのでwin-winの関係を考案することに苦労しましたが、ビジネスを立ち上げることのおもしろさを知りました。ゼミで培ったプレゼン能力が発揮でき、高い評価を得ることができました。

議論を交わす重要さ痛感

商・神原理ゼミ（小野卓哉、小林美穂、藤村剛次、上村理絵＝4年次）

荒井商事が展開する業務用スーパーを買い物しやすく、楽しめるようにするための改造計画と、卸売市場の地域密着を目的としたイベントを考案。ゼミと同様にフィールドワークでの情報収集を大切にし、消費者目線を心がけました。議論する中で、急に新しいアイデアが生まれるといったことを経験し、意見を交わすこと、議論することの重要さを感じました。

卸売市場でイベント開催

商・石川和男ゼミ（鈴木麻莉乃、田中裕美、木村杏奈、島津将吾、久保山大志＝3年次）

「市民に開かれた卸売市場の構築」（荒井商事）という課題に対し、料理コンテストと、料理教室の実施を提案しました。どちらも来場者を対象としたイベントで、「地域交流の場としての卸売市場」の実現を目指しました。SWOT分析による現状把握など、ゼミでの学びを活用し、構成のしっかりした提案になったと思います。

足で調べる大切さを実感

商・神原理ゼミ（安達佑太郎、宮田鮎美、茂木さおり、北山ともみ＝4年次）

「崎陽軒らしい社会貢献について」という課題に対し、〝社会貢献〟という知られにくい活動を外部にアピールする方法を考案。ゼミでのフィールドワークの経験を生かし、店舗調査やアンケート調査を行い、提案をまとめました。課題を通じ、リーダーとしてチームをまとめることの大変さ、自分の足で調べることの大切さを実感しました。

チーム一丸は貴重な体験

商・神原理ゼミ（磯谷祐太郎、伊藤未樹、滝口真里＝4年次）

京急自動車学校の入校生獲得戦略の提案という課題に対し、デメリットの大きい教習料金の引き下げではなく、教習や教習所に新たな価値を付加することを目的に、イベントの開催など、3つのアイデアを提出。チームで一つの課題に取り組み、提案を考え、プレゼンを行うという経験は、これから社会人になる私たちにとって貴重な体験になりました。

大学の学び実社会に生かす

商・高橋義仁ゼミ（高橋裕、三浦寛、太田真美、高旗加奈子、藤本寛樹＝3年次）

CFSコーポレーションが展開するドラッグストアの売り場の充実のため、6つのアイデアを考案。特にPBパッケージの提案は他にはない斬新なもので、良くデータ分析した上で考察されていると、高評価をいただきました。大学で学んだことが社会で通用するかを測る場とも考えていましたので、入賞という結果を残せて良かったです。

最優秀賞2チーム、優秀賞7チーム

国田清志ゼミ（有我チーム）

最優秀賞　矢澤清明ゼミ（吉村チーム）

優秀賞　石川和男ゼミ（鈴木チーム）

優秀賞　馬場杉夫ゼミ（撰チーム）

優秀賞　神原理ゼミ（安達チーム）

優秀賞　福原康司ゼミ（西澤チーム）

優秀賞　神原理ゼミ（磯谷チーム）

優秀賞　神原理ゼミ（小野チーム）

優秀賞　高橋義仁ゼミ（高橋チーム）